

第1章 戦場

中国での戦い② 衛生兵として中国戦地へ

今野芳夫さんのお話から

○河北省 表紙裏地図

○中隊 旧日本陸軍の編制単位の一つ。三〜四の小隊からなり、一〇〇〜二〇〇名の兵員がいた。

○衛生兵 軍隊の中で、医療に関する役目を行う。

○歩兵 陸軍で、小銃・機関銃・擲弾筒などの小火器を装備し、徒歩で戦闘を行う兵。

○現認 実際にあつた事実として認めること。

○特務曹長 旧日本陸軍の准士官。少尉と曹長の間の階級。

○軍医 軍隊で、患者の診察、治療、衛生をつかさどる医師。

私は、昭和十四年（一九三九年）五月、札幌駅を出発して中国に渡り、河北省寧津県第二中隊に入隊し、私も含めて二名が衛生兵として高柳隊に配置されました。

私たち衛生兵二名は歩兵隊付きで、戦闘その他では歩兵と全く同じ行動をとりました。ただ、衛生兵には鉄砲は与えられていなくて、短い剣を持っていただけでした。

ふだん、衛生兵は、中隊本部の医務室で勤務していました。仕事は、隊員の病気予防と戦つてけがをした人たちの救急処置や収容でした。収容というのは、戦場の第一線でけがをした人などを救出し、戦闘が行われていない後方の安全なところまで運んで行くという仕事です。

戦場では、敵の弾丸が雨あられのように飛んできました。小さい戦闘と大きい戦闘がありますが、いずれの戦闘でも戦傷者が出ます。けがをして倒れた兵隊たちを何とか早めに収容して安全な地帯に運んでいかなければなりません。ですから、弾丸が雨あられのように飛びかう危険な中でも上官が命令を下せば、私たち衛生兵は、戦傷者の収容や応急処置、そして戦死者も後方に運んでいかなければならなかったのです。

戦死者あるいは戦傷者の現認、書類の作成も私たち衛生兵の仕事でした。本当は、特務曹長という、この仕事を専門に行う方がいたのですが、いつも特務曹長がついているわけではありませんでした。ですから、現地で戦死者や戦傷者が出ると、弾が人体のどこから入って、どこで止まったのか、あるいは貫通していったのかということを私たち衛生兵が書類に書いたのです。そして、できあがった書類を中隊長と軍医に提出しました。ただ、小さい戦闘には軍医も

○施療 病気の治療。特に貧民などに対しては無料の治療。日本軍が民衆の心を安心させるために行った宣伝工作の一つ。

○公民館 地域住民の教養の向上や交流の場として設置される施設。

つかない場合があります。その場合は軍医にかわって、私たち衛生兵が上司に提出することになります。その他に、軍医が治療した中国人負傷者のその後の治療を、軍医の命令で任せられるということもありました。

それから、だいたい月に一回から二回、施療といって、中国の人々のために無料で治療を行っていました。施療の場所は、公民館のような施設を利用しました。毎回、何十キロも離れたところから、数十人が治療に訪れました。どうしてそんなに大勢の人々がやって来るのかというと、このあたりは中国人医師が、戦乱を避けて安全な地帯に逃げて行ってしまったからなのです。ですから、超満員になるのですが、軍医は施療の場所には来ませんでした。衛生兵に任せられていました。この治療は無料でしたが、その代わり



戦闘で倒れた日本兵

イメージ図

○満州事変 昭和六年（一九三二年）から昭和八年の間の日中間の武力紛争。この時、日本の関東軍が、中国東北地方（満州）を占領し満州国を建国した。

○支那事変 日中戦争に對する、当時の日本側の呼称。

○ノモンハン事件 昭和十四年（一九三九年）、満州国とモンゴル人民共和国の国境地帯で起きた、日本軍とソ連・モンゴル両軍との軍事衝突。日本軍は大敗した。

○大東亜戦争 昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本政府はアメリカ、イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった日中戦争を含めて、「大東亜戦争」（大東亜とは東アジア・東南アジアのことと呼んだ。これに対して

薬は十分にあげられず薬が効いたかも分かりませんでした。けれども、とにかく非常に遠いところから来てくださるので、そんな中国の人々の気持ちを察して、病気が早く治るように、処置をしてあげたのです。

施療の日ではないのに、中国人が薬を求めて医務室に来ることもありました。二時間も三時間も「薬をくれ、薬をくれ。」と叫んでいるのです。けれども、あげられません。ですから、上司からは、医務室には絶対に中国人を入れてはならないと指示されていました。施療の場合は、日にちを決めて来た人に対して薬をあげたり処置をしてあげるのですが、そこは軍隊のけじめでした。

満州事変、支那事変、ノモンハン事件、大東亜戦争、これらが始まってから終戦になるまでの十五年間、日本人



イメージ図

アメリカ側では、対日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後の日本でもこの呼び名が定着した。

ただではなく東南アジアや中国なども含め、大ぜいの方が犠牲になりました。太平洋戦争では、日本人だけでも三百万人もの戦死者を出しました。戦争というものは、お互いが不幸になるものです。今後、絶対にすべきではありません。自国の兵や国民はもちろん、他国の兵や国民も犠牲にする戦争には、断固、大反対すべきです。戦争のような悲惨な、そして過酷なことは断じて二度と繰り返してはなりません。特に、戦争の際は、若い方々が矢面に立たされるのです。私は、心から永久の平和を願ってやみません。

戦争ほどむごたらしいものはありません。戦争は権力を握っている側の考えで起こされる場合が多いのです。ですから、戦争が起きるような気配があったら、断固反対して、いつまでも、いつまでも平和を守ってください。外国の人たちとも仲良くしていくと、いつまでものためには暴力その他も排除しながら日本の国を守っていくのです。特に若い方々には、これから先、平和を愛することを常に考えて生活してほしいと、心からお願ひします。

DATA

平成21年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成21年12月5日
- ・藤野南小学校



今野芳夫(こんの・よしお)さん

- ・大正6年(1917年)生まれ
- ・札幌市南区在住